
剣士と神子の物語

2000万パワーズ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

剣士と神子の物語

【Nコード】

N1147Y

【作者名】

2000万パワーズ

【あらすじ】

騎士を目指す少年レオは、村はずれの川辺に流れ着いた少女を助ける。ところがその少女は魔王復活を目論む邪教の神子で……

プロローグ

山間の小さな村に、危急を告げる半鐘が響き渡った。

「なんだ？ 何が起こったんだ！」

「騎士団だ！ 騎士団が攻めてきたぞ！」

「バカな！ なぜこの村のことが……」

慌てて家からとび出してきた少女を、怒号と悲鳴が包む。

武器の打ち合う音が聞こえる方へ顔を向けると、急峻な斜面にへばり付くように立ち並ぶ家々を打ち壊しながら攻め上ってくる集団が目に入った。

白銀に輝く鎧兜、まぎれもなく帝国の誇る神聖騎士団だ。

と、そのうちの一人が少女を指さして声を上げる。

「いたぞ！ 目標はあの銀髪の娘だ！ 必ず生かして捕える。他の者は一人残らず殺せ！」

「え……、私……？」

呆然としていた少女の腕が、不意に強く引かれる。

「アリシア、何ぼーっとしてるんだ！ 逃げるんだよ！」

よるめきながらも走り出したアリシアが目を上げると、よく見知った顔があった。

「エミリオ……」

普段から何かと世話を焼いてくれる頼れる幼馴染顔は、しかし恐怖と怒りに引きつっていた。

村の端まで来たところで、手を引かれながらもつい後ろを振り返る。

「ああ……」

アリシアの育った村は、一面火の海と化していた。

これまでの少女の人生が、その思い出の全てが、炎の中で灰になっっていく。

「うつ……どうしてこんな」

大きな瞳から、止めどなく涙があふれる。

「やつらが狙ってるのはお前だ、アリシア。真なる神の神子であるお前を、やつらに渡すわけにはいかない。なんとしても逃げるんだ」
止まっていた足を、エミリオの叱咤が後押しする。二人は再び駆けだした。

しかし。

「で、でも、村の出口は下にしかないよ？ こっちに逃げても、すぐ行き止まりじゃ……」

アリシアの指摘は、すぐに無情な現実となつて目の前に立ちはだかった。道が途切れ、切り立った崖に突き当たってしまった。見下ろすと、はるか下に流れが見える。そもそも村の唯一の出入り口である麓からの道を通つて敵が攻めてきた時点で、逃げ場などどこにもなかったのだ。

「なんとか、あいつらをやりすごして……」

エミリオも辺りを見回すが、あいにく身を隠せそうな場所は見当たらない。

どうすることもできずに立ち尽くしている二人の背後から、大人数の足音が近づいてくる。

「どうした、もう逃げないのかな？」

嫌味な声に振り返ると、隊長らしき一際派手な鎧を着た男が、数名の騎士を従えて立っていた。すぐに半円状に二人を取り囲む。

「娘、我らはお前だけは生け捕りにし、他は皆殺しにせよと命を受けている。だがあまり追いつめて、足を滑らせでもされたら困る。そこでだ」

そこで一旦言葉を切り、いやらしい笑みを浮かべる。

「お前がおとなしく我々についてきてくれるなら、そちらの男も助けてやるう。どうだ？」

男の台詞に、アリシアは戸惑う。このままではエミリオも殺されてしまう。どうせ逃げられる望みがないのなら、自分が捕まってエミリオだけでも助けたほうがいいのでは？

「ほ、本当にエミリオを助けてくれるの……？」

「なっ、だめだアリシア、何言ってるんだ！」

エミリオが慌てて制止しようとするが、男は笑みを崩さない。

「もちろんだとも。私も騎士だ。約束は守るさ」

その言葉に、心が決まらないままフラフラと数歩踏み出したときだった。

男が急に笑みを消し、短く「やれ」とつぶやいた。

「ぐっ」

背後から聞こえた声に振り返ると、エミリオの腕に矢が刺さっていた。

「エミリオ！」

「だ、大丈夫だ」

駆け寄ったアリシアに気丈にも笑みを見せるエミリオだが、その額には脂汗が浮いている。

「ちっ、下手くそが。きちんと仕留めんか。せつかく娘を引き離したというのに」

男は苦々しい顔でこちらを見ている。

「そんな、どうして！ エミリオには手を出さないって言ったのに！」

「フン。なぜこの私が平民、それも汚らわしい異教徒との約束を守らねばならん」

そう吐き捨てると、アリシアに物を見る様な視線を向けて命令する。

「とにかく、これでその男はもうお前を守ることはできん。どうせ逃げられんだ、これ以上手間をかけさせるな」

アリシアの足元から、じわじわと絶望が這い上がってくる。もう、どうしようもないのか……

そのとき、エミリオが怪我をしていない方の手で懷から何かを取り出し、アリシアの手に握らせる。見ると、小さな袋だった。中身はわからない。

「これは……？」

「さあ、よくわからんが、お前にとって大きな意味を持つ物らしい。昔、お前の親父さんから預かったんだ。自分にもしものことがあったら、アリシアに渡したくれてな。しっかり持って、絶対なくすんじゃないぞ」

「え、でも……」

今、こんな物を渡してどうしようというのか。どうせ二人とも助かりはしないのに。

不意に、エミリオが無事な方の腕でアリシアを担ぎ上げる。

「きゃっ」

「最後の手段だ、しっかりつかまっとけ」

そして、背後の切り立った崖に向かって走り出す。

「なっ、いかん。矢を射る、止めるんだ！」

エミリオの行動に気付いた男のわめく声が聞こえる。数本の矢がエミリオの背に突き刺さるが、構わず走り続ける。

「行くぜ、舌かむなよ」

歯を食いしばってそう言うやいなや、エミリオは空中に身をおどらせた。小さな体を、庇うようにきつく抱きしめる。

アリシアはぎゅっと目をつぶり、幼馴染にしがみつく。

（助けて……私はどうなってもいい、エミリオだけでも助けて！）
必死に祈るアリシアの手の中から、かすかな光が漏れる。目をつぶっている彼女は気付かなかったが、その白い光は次第に強まり、アリシアとエミリオの体を包み込んでいく。

まばゆい光に包まれて、二人は水面へと吸い込まれていった。

第一話

頭上から、巨大な爪が降ってくる。

「うおっ」

身をかがめて躲した一撃は後ろの木に当たり、大人の胴ほどの太さがある幹を軽々とへし折った。

動きの止まった相手の横を駆けぬげざま、胴体に斬りつける。

「グルアアア！」

痛みに怒りの咆哮を上げてゆつくりと振り返ったのは、巨大な熊だ。ただの熊ではない。全身の毛をざわめかせ、両の眼からは血のように赤い光を発している。

魔物。

かつて神によつて地の底に封じられた魔王の憎悪や憤怒が瘴気となつて大陸各地で地上に滲み出し、触れたものを異形の存在へと変える。浴びる瘴気の量によつて差は出るが、魔物化した生き物は体が大きくなり、力が増し、さらに人間に対して強い殺意を持つようになる。

人間が瘴気を浴びても魔物となることはないが、肉体に多大な損傷を受け、浴び続けると死に至る。これは魔王の憎悪が、神のしもべたる人間にも向けられているためだと言われている。

「効いたかな……？」

魔物と化した熊と対峙する少年が呟く。

その言葉の通り、向かってくる魔物の動きは明らかに鈍っている。脇腹の傷は致命傷ではないが、手応えからしてかなり深いはずだ。しかし、狂気に突き動かされている魔物が退くことは有り得ない。

対する少年は、大きな傷は負っていないものの全身に無数の擦り傷や痣と作り、滝のような汗を流している。もう半刻ほど魔物と一対一で戦っている彼の体力は、そろそろ限界に近づいていた。

「ここが勝負所だよな。よし！」

柄を含めれば自身の背丈ほどもある長大な剣を構えて、間合いを詰める。魔物熊の繰り出してきた前足を跳躍してかわし、剣を大きく振りかぶる。

「でやあああっ！」

気合とともに振り下ろされた刃は、骨と肉を切り裂きながら突き進み、心臓に到達した。

「グルウオオオオ……」

断末魔の声を上げて倒れた魔物の体から黒い煙のようなものが立ち上り、空に溶けるように消えた。後に残ったのは、一回り小さくなった熊の死骸であった。それでも少年よりは遥かに大きいのだが。

「はあ……はあ……」

体力を使い果たし、剣を杖にしてなんとか立っている状態の少年は、それでも他の魔物が現れないかと周囲を警戒していたが、

「おい、レオー！ 無事かー」

自分の名を呼びながら近づいてくる複数の足音に安堵の表情を浮かべ、その場に座り込んで大きく息をついた。

やってきたのは村の男たちだ。レオとは別の場所で、数人ずつで魔物を相手にしていたのだが、どうやら全員無事のように。手に手に兎や猪などをぶら下げている。彼らが倒した魔物だろう。

「おうレオ、無事だったか。よかった」

「お前が一番強いのを引き受けてくれたおかげで、助かったぜ」

「いくらなんでも無茶だと思ったが、本当に一人であんなのを倒しちゃうとは、大したもんだ」

「さすが、ジークの息子だな」

口々にレオを褒め称える男たち。

「へへ、俺は騎士になるんだぜ。これくらいどってことないよ」

照れくさくなったレオは、口癖になっている自らの目標を口にして立ち上がった。

「それより俺、くたくたでさ。村までこいつを運ぶの、手伝ってくれよ」

そう言つて、先ほど倒した熊を見下ろす。魔物が死ぬと、体から瘴気が抜けて元の生き物に戻る。これだけ大きな獲物なら、村にとつては貴重なご馳走だ。

協力して熊をはじめとした獲物を運び、しばらく歩くと森が途切れ、村が見えてきた。向こうからもこちらの姿が見えたのだろう、広場に住人が集まっている。やがて歓声に迎えられた。

ミトロヒア神聖帝国の西部辺境にあるカーサ村は、人口百人ほどの農村だ。特産品があるわけでもなく、街道からも外れているこの村には、月に一度行商人がやってくる以外は訪れる者もめったにいない。

先頭に立つて広場に入ったレオに、人波をかき分けて駆け寄ってくる女性がいた。母のローサだ。

「レオ！ 大丈夫だった？ どこか怪我してない？」

レオの体を触って確かめ、心配そうに顔を覗き込んでくる。

「ただいま、母さん。大丈夫だよ、ちょっと擦りむいたくらいさ」

「そう……よかったあ。レオが怪我でもしたらと思うと心配で心配で」

ほっと胸をなで下ろしてから、思い出したようにニツコリと微笑む。

「おかえりなさい、レオ」

もともと帝都に住む貴族だったという母は、騎士だった父と駆け落ちしてこのカーサ村にやってきたらしい。二十年たった今でも、若々しい美貌を保っている。

「そんなに心配しなくても平気だよ、母さん。俺ももう十五だし、毎日鍛えてるんだ。もう父さんの剣だってちゃんと使えるんだぜ」

そう言つてレオは背負っていた剣を抜いて目の前に掲げる。父の形見である大剣は数多くの戦いを耐え抜いてきたのがウソのように刃こぼれ一つなく、日の光を反射して輝いている。長大な剣は重く、自在に振るえるようになるまでには長い鍛錬が必要だった。

「あと二年たてば、騎士登用試験を受けられる。父さんと同じ騎士

「なって、ずっとこの村を守るんだ」

何度となく口にしてきたレオの言葉を聞くと、母はいつも誇らしさと悲しみが同居したような複雑な表情を浮かべるのだった。

住民みんなで分配した獲物を持って、家路につく。レオは一人で熊の魔物を倒した功績で、その肉の半分をもらった。母と二人なら、かなりの期間食事には困らない。

レオの家は、村の外れにあった。両親が帝都から来たよそ者ということに遠慮して、この場所に家を建てたのだ。村の人たちはそんなこと初めから気にしなかったのだが、川に近くて便利だったこともあり、そのまま現在もこの家を使っている。

「レオ、お水を汲んできてちょうだい」

母に言われて、桶を持って家を出る。

数分も歩くと、川辺に出た。

西の山脈から流れてきたこの川は下る程に川幅を広げ、大陸を貫く大河となる。

源流に近いこの辺りではまだそれほど広くはないが、穏やかな水面は夕日に照らされて、黄金色に輝いている。レオはこの眺めが好きだった。小さな頃、よく父に肩車してもらって、沈んでいく太陽をいつしよに見ていたことを思い出す。

感慨にふけりながら水辺に近づいていくと、何かが岸に引っかかっているのが見える。はじめ布の塊のように見えたそれは、よく見ると人間ではないか。

「うわ、人だ！」

慌てて駆け寄り、抱き起す。長い髪に隠れていた顔があらわになる。あまりの美しさに、一瞬見とれるレオだったが、ハッと我に返る。

「おい、しつかりしろ！」

空は紅から藍へと移ろい、星が瞬き始める中、レオの声だけが川面に響いていた。

第二話

夜の空気を白銀の刃が切り裂く

すでに高く昇った月明かりの下、河原で剣を振るレオの姿があった。

さきほど見つけた少女は、今はレオの家で眠っている。大慌てで家まで運び、母に見せたところ、命に別状はないので、体を温めて寝かせておけば大丈夫だろうということだった。念のため村で唯一の医者でもある村長にも来てもらったが、母と同じ結論に達した。彼女が何者なのか、どこから来たのか。訪ねたいことは山ほどあったが、本人の意識が無いのではどうしようもない。とりあえず様子を見る方向で落ち着いた。

レオもしばらくはベッドの横に付き添っていたのだが、だからといって少女が早く目覚めるわけでもないで、日課の鍛錬をすることにした。彼女の顔を見てみると、なぜかもっと見ていたいようなじつと見つめているのが照れくさいような、自分でもよくわからない気分になってくる、というもある。

雑念を振り払おうと剣を握る手に力を込めるが、今度は昼間に戦った魔物のとが頭に浮かんでくる。

魔物との戦いは、そう頻繁にあるわけではない。年に数回といったところで、現れる魔物も単独なことが多い。今回のように複数の群れで襲ってきたのは、かなり珍しいことだった。また熊のような生命力の強い獣が魔物化することは少なく、レオが出会ったのは今日が初めてだ。

「あんな魔物一匹に手こずるようじゃ、まだまだだ。父さんみたいに村を守るには、もっと強くならないと」

レオは父の戦う姿を直接見たことはないが、他の村人に聞いた話ではとてつもない強さであり、今日レオが戦ったような魔物なら何の苦も無く倒せたという。

「父さん……」

レオの父は五年前、レオが十歳のときに死んだ。

その時、カーサ村を魔物の群れが襲った。複数で現れること自体が稀であるはずの魔物が、百匹近い数で村に迫ってきた。その中には狼や熊などの強力な個体も多数含まれていた。これは現在までに確認された中では最大の規模であり、原因は未だにわかっていない。ゆっくりと近づいてくる絶望に村中が支配される中、父は自分が時間を稼ぐから皆はその間に避難するようにと申し出た。誰もが無謀だと思ったが、その強さは皆の知るところであり、座して全滅を待つよりはと、父の剣に賭けることにした。幼かったレオは村人たちの申し訳なさそうな表情の意味や母の涙の理由はわからなかったが、漠然とした不安を感じていた。

「レオ、お母さんをたのむぜ」

最後に見た父の笑顔、頭に乗せられた大きな手の温かさ、そしてその言葉はレオの心に深く刻まれた。

レオと母を含めた村人は魔物に襲われることなく、無事に近隣の町へと非難できた。けが人の一人もない。そして彼らの要請をうけて騎士団が出動した。村に駆け付けた彼らが見たのは、全身を返り血と己の血で染め、村を背に庇って剣を構えたままこと切れていく父の姿だった。

避難先のレオのもとに、騎士団の將軍自ら父の剣を届けてくれた。アマデオと言う名のその騎士は、かつて帝都で父の部下だったという。

「君のお父上、ジークフリート殿は私の理想であり目標だった。騎士団を離れてもなお、最期の瞬間まで本当の騎士だったよ」

言葉とともに差し出された剣にすがりついて、レオは大声で泣いた。喉が哽れ、涙が涸れても泣き続けた。母も大粒の涙を流しながら、レオをきつく抱きしめてくれた。

それ以来、レオは毎日毎日剣を振り続けてきた。父と同じ騎士に

なり、父が愛したこの村と母を守るために。

少女を助けた翌朝、床に敷いた毛布で寝ていたレオは、顔に当たる朝日で目が覚めた。一瞬、寝ぼけてベッドから落ちたのかと思っただが、すぐに自分の寝台で寝ている人物のことを思い出す。

少女はまだ眠っていた。うなされている様子もなく、穏やかな寝息を立てていたが、頬には涙の跡が見える。

レオはその寝顔を見てなぜか胸に棘が刺さったような痛みを感じ、そつと彼女の目元から頬を拭う。その後自分の行動に気付いて無性に恥ずかしくなり、狭い部屋の中をうろろと歩き回る。

「うっん……」

不意に聞こえた声に、レオの動きがピタリと止まる。そして息を詰めて見つめる中、少女の瞼がゆっくりと持ち上がった。

「あれ……？」

焦点の合わない眼でつぶやいた後、しばらくぼんやりとレオの顔を眺めていたが、やがて自分を覗き込んでいるのが見知らぬ少年の顔だと気付いたようで、目が大きく見開かれる。宝石のような青い瞳だった。

「ここは？ 私はいつたい……？」

上体を起こし辺りを見回す。自身の置かれた状況がわからず混乱している少女に、レオはできるだけ優しい声音で話しかけた。

「大丈夫だ、落ち着け。まだ動かない方がいい」

「あなたは……？」

少女の向けてくる怯えた視線に、レオの心臓が飛び跳ねる。

「お、俺の名前はレオンハルト。でもみんなレオって呼ぶ。えっと、昨日君が川辺で倒れてたのを見つけて、それで、」

しどろもどろになるレオだが、少女はその言葉で何かに思い当たったらしい。

「川……そうだ、村が襲われて、私は川に落ちて……、あ、エミリオ！」

レオに掴み掛らんばかりに身を乗り出してくる。

「あの、私と一緒に男の人いませんか？　一緒に川に落ちたんです！」

少女を落胆させたくはなかったが、ここでウソを言ってもしかない。

「いや、俺が見つけたのは君だけだった。君をここに運んだ後もう一度河原に行ってみたけど、他の人は居なかった」

少女の瞳からみるみる涙がこぼれ出す。さきほどよりも強くなった胸の痛みを抱えて、レオは静かに嗚咽する少女を見ていることができなかった。

第三話

しばらくして落ち着いた少女は、

「ごめんなさい、お礼も言わないで。私はアリシアといいます。助けてくれて、ありがとうございます」

そう言くと、微笑んで頭を下げる。

眠りながら涙を流す姿を見ただけに、悲しみを押し殺したその姿に、レオは胸を締め付けられるような気がした。

意識を取り戻したら、いろいろ質問しなければならぬ事があつたのだが、そうする気になれない。何か言おうと思うのだが、何を言ってもいいかわからない。

気まずい沈黙が落ちそうになった時、少女が口を開いた。

「あ、あの……」

なぜか恥ずかしそうに頬を染めている。

「ええと、レオン……？ すみません、ぼーっとしていて」

申し訳なさそうに眉を下げた顔を見てみると、レオの心にのしかかっていた思い何かが少し軽くなった。すると美しい少女と向かい合っていることを思い出して、今度はレオの顔が熱くなる。

「レオンハルト。レオでいいよ。それに畏まった喋り方もやめてくれないかな。なんか耳馴れなくて」

「はい……じゃなくて、うん。わかった、レオ」

顔を背けて頭をかくレオに、アリシアはそう言つて小さく笑う。

初めて彼女の自然な笑顔が見られて、レオは心底ホッとした。

そこへ、母のローサが入ってきた。

「あら、気がついたの。よかった」

急に現れてニコニコと自分を見ている女性に驚いている様子のアリシアに、レオは笑いながら告げる。

「俺の母さんだよ、アリシア。気を失つて君を手当てしたのは母さんなんだ」

「レオの母のローサよ。よろしくね」

「あつ、失礼しました。アリシアです。ありがとうございます」
焦って挨拶を返すアリシアに、ローサも目を細める。

「気がついたのならよかったわ。朝ごはんの前に、体や髪を洗わなきゃね。いらっしやい」

そう言つて有無を言わせずアリシアの腕をとる。

「え、え、あの……？」

目を白黒させながら引きずられていく少女を、少年は呆然と見送った。

アリシアがローサに連れてこられたのは、歩いて数分の所にある川辺だった。昨日、アリシアはここに流れ着いていたらしい。

そこで髪や体を洗った。長い髪に絡みついた埃や泥がなかなか落ちずに苦労していると、ローサが優しく洗ってくれた。丁寧に梳つてくれる手の感触に、何故かとても安心できた。

そうして水浴びを終えて、ローサの持ってきてくれた服に着替えて一息ついたころ、ローサが小さな袋を取り出した。

「昨日、ここに落ちてたんだけど、これはあなたの物かしら？」

「あつ」

それは確かに、村から逃げる時にエミリオから手渡されたものに違いない。大事なものだと言われていたのに、どうして今まで忘れていたのか。自分に腹が立つ。

「悪いとは思ったけど、中を見せてもらったわ。これがどういう物か、わかってる？」

ローサの顔からはさきほどまでの笑みは消え、恐ろしいほど真剣な表情が浮かんでいた。

差し出してきた袋を受け取って、中身を出す。

「え、これ……」

出てきたのはペンダントだった。細い銀の鎖につながった本体は水晶で、翼を広げた竜を意匠化した紋様が刻まれている。

まじまじと手元を見つめるアリシアにローサも驚いたようで、

「もしかして、中身がなにか知らなかったの？」

意外そうに聞いてくる。

「はい。つい最近、渡されたんです。私にとって大切な意味を持つものだ、絶対になくすなつて」

「そう。じゃあ、その紋様の意味はわかる？」

「はい、翼を広げた竜は、皇帝家の紋章……でも、どうして私に」
混乱するアリシアにするどい視線を向けながら、ローサは念を押すように問いかける。

「もう一度きくけど、これは本当にあなたの物なのね？」

その問いに、おそろおそろ頷くアリシア。そして、このペンダントを手にするまでの出来事を、すぐるようにローサに話した。村での暮らし、自分の立場、騎士団に襲われたこと……

「そう……」

聞き終えたローサは、何事か考え込んでいた。

「真なる神……よりによってこの子が……なんて皮肉な」

アリシアの髪と瞳に目をやって呟いたローサは、やがて顔を上げて言った。

「帰りましょう。この話は、レオも一緒に聞いたほうがいいわ」

第四話

一人になった家の中で、レオはじつと座って、窓から見える空とのんびり横切っていく雲を眺めていた。さきほどの少女の悲しげな顔が、こぼれる涙が、なぜか頭から離れない。

そうして数分たっただろうか。家の扉を叩く音でレオは我に返った。

「誰だろ」

ローサならばノックなどしないし、村の人が訪ねてくるときも、こんな控えめな音ではない。

訝しく思いながらドアを開ける。その場に立っていた人物を見て、レオの目が大きく見開かれた。

「失礼。昨夜、川で溺れた少女を保護したというのは、こちらだろうか」

礼儀正しくかけられた言葉にも、とっさに反応することができない。

五年ぶりだが、まちがいない。父が死んでから、レオが目標としてきた騎士。

「あ……アマデオ將軍！」

今日は鎧姿ではなく、青を基調とした騎士団制服の腰に剣を差しただけの姿だが、流れるような金髪と鋭い視線は見間違いようもない。大陸西部を守護する神聖騎士団第四軍団長、アマデオ・セルバントス將軍その人だった。

驚きと感激の入り混じった目を向けてくるレオに、アマデオはしばし戸惑っていたようだが、レオの体と扉の隙間から見える壁に立てかけてある剣を見て、目の前の少年が誰か思い当たったらしい。

「君は、もしかジークフリート殿の……」

「はい、息子のレオンハルトです！」

レオの返事に目を細め、改めて少年を眺める。

「そうか……大きくなったな」

五年前の、父の剣にとりすがって泣く姿と重ね合わせているのだろっ。

「俺、アマデオ様みたいな騎士になりたいんです!」

「ふふ、それは光栄だな。君はあのジークフリート殿のご子息。努力を怠らなければ、必ずや立派な騎士となれるだろう」

あこがれの騎士からかけられた言葉に、レオは天にも昇る気持ちであつた。

「あ、ありがとうございます!」

満面の笑顔でこたえた後、いつまでも將軍を家の前に立たせていることの失礼に気付いた。

「あ、すみません。どうか入ってください。狭い家ですが」

慌てて家の中に招き入れ、一番ガタの来ていない木の椅子をすすめる。

「ところで、今日はどうしてこの村に?」

先に告げられた要件が全く耳に入っていなかったレオがたずねると、アマデオはそれまでのにやかな表情を消し、どこか暗い顔で話し始めた。

「ああ、そのことだが。レオ君、昨夜、川で少女を助けなかったか? 村長にこの家だと聞いてきたんだが」

「少女? アリシアのことですか?」

何気なく答えたレオに、アマデオは身を乗り出す。

「やはり、ここにいるのか? そ、その少女はどこだ?」

急に声を荒げたアマデオにレオが戸惑っていると、ちょうど扉が開き、室内に向かって声がかけられた。

「アマデオ……?」

戸口に立っていたのはローサ。驚いたようにアマデオを見つめている。そしてアリシアは、なかば隠れるようにその後ろに佇んでいた。

レオは、その姿にしばし見とれた。さっきまで汚れて何色かもわからなかった髪が、日差しを照り返して銀色に輝いている。レオは初めて目にする色の髪だった。

その間にアマデオは立ち上がり、ローサに丁寧に一礼する。

「ローサ殿、お久しぶりです」

そして隣の少女に目を向ける。自分をじっと見つめるアマデオに、アリシアはなぜか怯えているようだ。

「その髪、その眼。まちがいない」

アマデオは眩き、その場に膝をついて頭を垂れるそして

「お迎えにあがりました。皇女殿下」

その一言で場の空気が凍りついた。レオとアリシアは言葉の意味がとっさに理解できず、彫像のように固まったまま言葉の主を眺めている。ローサだけがあまり驚いた様子もなく、沈痛な面持ちでアリシアをみていた。

「な……何言ってるの」

震える声で問いかけるアリシアに、アマデオは顔を上げ、

「あなたは十五年前、生まれて間もなく帝城より誘拐された、皇女殿下にまちがいありません。私は帝国の命を受け、あなた様を探しておりました」

二人の会話を聞きながら、レオはぼんやりと以前母に聞いた話を思い出していた。現在十八歳の皇太子イグナシオには三歳下の妹がいたが、生まれてすぐに病気で亡くなったと。

（その死んだはずの皇女がアリシア？ そんなことが……）

レオの思考は、アリシアの叫びに遮られた。

「うそ！ 騎士の言うことなんか信じられない。騎士団は、帝国は……」

涙のたまった瞳でアマデオを睨み付ける。

「私の村を襲ってみんなを殺した、仇なんだから！」

家じゅうに響くアリシアの声。しかしアマデオは少しも動じず、淡々と言葉を重ねる。

「殿下を危険にさらしたこと、まことに申し訳ありません。しかし、かの村の者どもは皇女殿下をさらった罪人。さらには教会の教えを踏みじり魔王を復活させんとする邪教の徒です。神の裁きを下すことこそ世のためなのです」

アマデオの目には一片の後悔や後ろ暗さも宿っていなかった。自分の言葉を欠片も疑っていないのだらう。

「山奥の村で暮らしている人たちを問答無用で皆殺しにすることが、世のためなの？ ふざけないで！ お父さんを、みんなを返してよ！」

アリシアの血を吐くような叫びも、アマデオの表情に少しの波紋を立てることもできない。

このときレオが受けていた衝撃は、かつて経験したことがないものだった。アリシアが皇女だと言われた時の方がまだしも冷静だった。

（騎士団が村を襲って皆殺し？ そんな馬鹿な）

しかし、アマデオは否定しなかった。必要なことだからと認めたのだ。

（そんな……騎士団がそんなことを……）

小さな頃から、騎士とは全ての者を守る存在であり、レオもそうなりたいと目指してきた目標であり夢そのものだった。その理想が脆くも崩れようとしている。何が真実で何を信じればいいのか。レオはもう何も考えられなかった。

「ご理解いただけないのなら仕方ありません。なんとしても、お帰りいただく」

アマデオが立ち上がり、一歩前へ出る。アリシアは押されるように、家の外へと後ずさった。

「いや！ 来ないで！」

どこか遠くから聞こえる様なアリシアの声が、真っ白だったレオの意識に染み込んでいく。まだ出会ってわずかな時間しかたっていないが、その中で見た悲しげな寝顔、無理に作った微笑み、思わず

こぼれた小さな笑顔、レオを見つめる青い宝石の瞳が浮かんでくる。
「助けて！ レオ！」

ふと気づくと、家の前の道で、鞘に入った剣を手に、いつの間にかアマデオと向かい合っていた。背後にアリシアを庇う形だ。

「レオ……」

驚いたような小さな声が背中から聞こえた。

「レオ。どきなさい」

アマデオの静かな声で我に返ると、全身から冷や汗が噴出してくる。今、自分の目の前にいるのは、あまりに大きな相手だ。帝国騎士団総勢の五分の一を束ねる、歴戦の騎士。立ち向かうなど、どう考えても無謀。それに、彼がレオにとってあこがれの存在であることも変わっていない。

だが。

「いやです」

今この場で、嫌がるアリシアを強引に連れ去ることを座して見ているわけにはいかない。アリシアが本当に皇女なら、帝都に帰ることが正しいのはレオもわかる。アマデオの言ったことが、帝国の常識から考えて正論であることも知っている。

それでも、アリシアを連れていかせたくない、この手で守りたいと、レオの中で何かが叫んでいる。子どものわがまま、つまらない意地と言われてもかまわない。相手がどんなに強くても、ここだけは譲れない。

「やめておけ。お前を斬りたくなどない」

言いながら、アマデオがゆっくりと剣の柄に手をかける。それだけで腰が砕けそうになる。その恐怖をどうにかなだめすかし、レオは震える手で剣を鞘から抜く。

「そうか。ならば仕方がない」

アマデオが悲しげにしばし瞑目し、自らも剣を抜こうとしたときだった。

「神よ、かの者に罰を！」

という声が聞こえたと思うと、まるで見えない巨人の手で殴られたかのように、アマデオの身体が真横に吹き飛んだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1147y/>

剣士と神子の物語

2011年11月9日13時04分発行